
Bye My Melody

小室 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

By e M y M e l o d y

【Nコード】

N 3 0 3 1 S

【作者名】

小室 仁

【あらすじ】

大好きなアーティストの歌の自分勝手なイメージ短編、第二話。

蛍光灯の明かりが眩しい。

しょう子はパソコンの画面から目を上げると、両手でそっと目をもんだ。

午後8時。

事務所の中には、今は自分の他は誰もいない。

国連からの書類は独特な表現や言い回しをするので、英語を話せても、翻訳を苦手とする者が多く、こういった固い文書の翻訳は常にしょう子の役割だった。

今日中に、もう一つ公文書を翻訳して帰らなければならない。

どうしても、今夜の健一との約束には間に合いそうにも無かった。

「しょうがない、電話するか」

しょう子は気が重く沈むのを感じながら、のろのろと自分のバックに手を伸ばした。

途端、携帯が鳴る。

付き合い出してから7年間、ずっと変わっていない着信メロディ。

曲は「New York State of Mind」

健一の特定着信音だ。

携帯を引っ張り出し、その黄色く光る画面を見ると、

案の定、健一の名前があった。

しょう子は通話のボタンを押して、画面を耳に押し当てる。

「ごめん、まだ事務所なの」

しょう子と言う。

「またかよ」

不機嫌な健一の声。

「仕事と俺とどっちを取るんだ。早く決めてくれ。」

妻帯が俺のこれからの出世の条件になってるのは、お前も知ってるだろう？」

畳み掛けるような健一の声。

いつから私は、健一の恋人という存在から、

彼の単なる出世条件の項目の一つ、

「妻帯」の対象に変わってしまったんだろう。

ここのところ会えばこの話で、しょう子はいいい加減うんざりしていた。

大体「自分と仕事のどっちをとるのか」なんて言葉は、女の台詞だったのではないのか。

「うん、分かってる。本当にごめん。」

でも、どうしても今夜中に、訳さなきゃいけない書類があって、

インドの過疎地の村における伝染病ワクチンの、緊急輸送経路の問題で・・・」

しょう子が今やらなければいけない仕事の重大さを訴えようと口を開くと、

「分かった。もういい」

健一が通話を一方的に切った。

しょう子は携帯をじっと見て、大きくため息をついた。

明日の夜にでも、健一のマンションに行って、

ご機嫌を取らなければならない。付き合いだしたばかりのカップルでもないのに、

最近、一緒にいると気を使って疲れてしまう。

しょう子は首を小さく左右に振って、携帯をバックに戻すと、パソコンの画面に目を戻した。

しょう子は32才だ。幼い頃から親の仕事の都合で海外で暮らし、英語を含め、4ヶ国語くらいはネイティブに近く話せる。小さい頃から人のためになる仕事を考えていて、大学の卒業後、念願だった世界各国に拠点を持つ大きいNGO団体の、

職員として勤めて10年目だった。

ただ、現地のスタッフとして働いたことはなく、日本支部の事務専門でやってきていた。

何度も途上国の現場で働く話は回ってきたが、

健一が存在が海外勤務に対して、

しょう子に、ブレーキをかけさせていたのだった。

七年前、健一とはある出会い系のパーティで知り合った。

一流の商社に勤めている、エリートサラリーマンだ。

ふと、事務所のドアが開いて、しょう子の上司のアランが顔を出した。

赤毛でそばかすだらけの顔をした、背の大きいフランス人だ。でも事務所の公用語は英語になる。

「しょう子、まだいたのか」

大げさにジェスチャーをして、アランが言う。

「だって、どなたかがたくさんお仕事くれたもんだから、まだ終わらないのよ」

しょう子は肩をすくめて言った。

「それはご苦労さん」

アランは一回姿を消すと、

次には、両手にコーヒーの入ったカップを持って現れた。

「ねえ、しょう子。君、パキスタンへ行ってみないか？」

しょう子は顔を上げる。

「そろそろ現場に行って、君の知識や能力を試す時じゃないか？」

アランはしょう子を見て続けた。

「今度、パキスタンで新しく、女子児童の教育支援を始めるんだ。

途上国における、特に過疎の村の女子児童の差別は激しく、

教育を受けることもままならないのは君も知っているだろう。

字を書くことや、生きていく上に必要な常識や知識などを、

親たちは女子を差別して、教育など必要ないとして受けさせようとはしない。

無知は、生命の安全を損なわせる。だから我々のようなNGOが率先して、

女子児童が教育を受ける機会を作って」

「子供たちが、自立して生きていける力をつけるようにしてあげる」
しょう子がアランの言葉を続けた。

「そうだ。君なら現地スタッフのリーダーとしてやれるだろう」

アランがにっこり笑う。しょう子も微笑んだ。

「そうね、考えておきます」

しょう子は言うと、パソコンに目を戻す。

パキスタンの前に、とにかく今はこの書類を終わらせなければ。

アランは頷くと、自分のデスクに戻って行った。

結局、仕事が終わって事務所を出たのは午後の9時を回っていた。

夕食をどうしようと考えて、今夜はどうしても、

コンビニの弁当は避けたい気がしていた。

少し遠回りになるけれど、健一と行ったことがある小さな居酒屋に

寄って、

一人で何か食べて帰ろうかと思った。

家路と反対方向の地下鉄に乗り、その店の最寄の駅で降りて階段を上る。

階段を上りきったところで、しょう子は足を止めた。

道路の反対側にあるその目当ての居酒屋の前に、健一の姿を見つけたからだ。

そのスーツの腕に絡みついて、20代前半と思われるOL風の若い女が、

健一を見上げていた。

自分を見上げる若い女のおでこを指で親しげに突付くと、

健一はその店の扉を引いて、二人は中へ一緒に入って行った。

男女の仲など、どういう関係なのかは見れば分かる。

しょう子はくるりと踵かかとを返すと、上ってきた階段を降り始めた。

健一はしょう子の電話を切ってから、

早速出世条件「妻帯」の、次の候補者を当たっていたというわけだ。

「そんなに出世したいわけ」

しょう子は小さく呟く。

すると同時に、以前言われた健一の声が蘇る。

「そんなに仕事がしたいのか」

しょう子は小さく息を吐くと、自動改札の中へと戻って行った。

しょう子がN G Oの団体に勤めようと思ったのは、父親の仕事の関係で小学1年までいたインドで、出会った一人のストリートチルドレンの影響だった。

一人で家から出てはいけないと言われていたのに、ある日しょう子は、一人で家の外に出てみた。

不衛生で治安の悪い白っぽい土の路上で、しょう子と同じ年くらいのその少女は、

犬と座り込んでいた。

その子がどうやって日々生活をしているのか、まだ幼かったしょう子には、

その時は、到底想像もつかない。

がりがりに痩せて、汚れてぼろぼろの元の色も分からないシャツを着ていて、

お腹を空かせているのか、しょう子の姿を見て両手を差し出してきた。

その落ち窪んだ黒い目の飢えの光に、怯えたしょう子は家の中に逃げようとして、そしてもう一度振り向いた。

その子は別にしょう子を追いかけてくるわけでもなく、ただそこに座っているだけだった。

しょう子はポケットの中に、おやつビスケットがあるのを見つけて、

しばらくの葛藤の後、その路上の女の子へと近づいて行った。持っていたビスケットを差し出す。

するとその少女は手を伸ばして、しょう子のビスケットを取った。

そしてそれを二つに割って、ひとつの欠片を犬に差し出して、もうひとつの欠片を、自分で食べた。

犬と一緒に美味しそうにビスケットを食べながら、しょう子をみてその少女は笑った。

花のような笑顔だった。

あの笑顔。

しょう子は大人になったら、

恵まれない貧しい人たちが、あんな風な笑顔になれるような、手伝いの出来る仕事がしたいとずっと思ってきた。

そして、念願がかなって今NGOの日本支部の事務をやっていると
いうわけだ。

毎日毎日、書類の処理だけの生活。

それでもああいう笑顔のための、一環を担っているのだという自負
はあるし、

実際そうだろう。

でも、日本にはああいうどうしようもなく貧しい、ストリートチルドレンなどは、いないのは事実だ。

実際に手を差し伸べるには、現地に行かなければこの生身の手は届かない。

地下鉄に揺られ、気がいたら自分の家の駅ではなく、

健一の住む駅に降りていた。

自分で無意識に行動していることに、しょう子は小さく笑った。

健一のマンションに向かう。

まだ当分、帰っては来ないだろう。

あの若いOLとあの店で酒を飲んでいるのなら。

持っている合鍵で部屋のドアを開けて、

慣れている手順で明かりをつけて、ヒールを脱いで部屋に上がる。

7年の間のどのくらいを、この部屋で過ごしただろう。

それほど、見慣れて知っている部屋。

セミダブルの黒いカバーのベッド、黒い皮のソファセット、
壁の色は白とグレー。飾ってある絵はリチャード・ハミルトン。

しょう子は冷蔵庫を開けると、中から缶ビールを取り出して、
一気に中身を煽った。

そして窓際に行き、これまたモノトーンのカーテンを引いて、
窓を開けた。

春の生ぬるい夜の空気が、遠くの東京の黒い海の香りをうつすらと
運んでくる。

きらきらとした夜景。雑踏の音。

パキスタンの事務所は二年前くらいに、
襲撃に合っている。確か、現地スタッフが一人命を落としているは
ずだ。

人道的な平和活動をしていても、途上国に行けば、
時にはそういう危険があるのは否めない。

だから、決して気軽な決意では決められない事なのだ。

でも。

しょう子は、東京の夜景を見て思う。

この平和な街は、私を必要としていないのかもしれない。

そして缶ビールの中身を飲み干して、健一の部屋を振り返る。

少なくとも、この部屋が私をもう必要としないのは確かだ。

しょう子は目を伏せると、苦く笑った。

でも、パキスタンに行けば、その女子児童達は、

絶望的なくらいに、私を必要としてくれるだろう。

そして、生きるという事に希望が持てた時、

きっとその子達は、あの笑顔を見せてくれるのだ。

しょう子は窓を閉めると、ざっと部屋の中の私物をかき集めた。

歯ブラシ、マイグラス、本、着替え。

見つけたスーパールの袋に、一緒くたに突っ込む。

そして部屋から出てドアを閉めると、

合鍵をポストの中に落とした。

ドア越しに部屋の中で、電話が鳴る。

これもしょう子の携帯の着信音と同じ、

「New York State of Mind」

健一の好きな曲なのだ。

「バイバイ！」

しょう子はドア越しに、その曲に向かって明るく言った。

暗い夜道を大きな荷物を抱えて歩く。

ふと、街灯が照らすアスファルトの路上に、

昼間子供たちが書いたのだろうか、

白いチョークの大きな丸がいくつも並んでいるのに気がつく。

しょう子は微笑んで、大きな荷物を持ったまま、
その丸を飛んだ。

「ケンケンパ、ケンパ、ケンパ、ケンケンパ」

パキスタンへ行ったら、こんな日本の子供の遊びも、
現地の子供達に教えて上げよう。
しょう子は思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3031s/>

Bye My Melody

2011年10月8日08時08分発行